

焼芋の焼き上がる前狙い付け

寒月の残りし朝のバス停に

野水仙揺れ遠山を景にして

勝利

鳥居には旧き町名初詣

光子

三極の一枝細く凍ててをり

戎笹掲げ珈琲店に入り

潮風にゆるる提灯初恵美須

つかと来て鈴鳴らしゆく仕事始

待春や味覚戻りし舌の先

佳与子

寒禽のひと声啼きてそれつきり

真理子

行く年や感謝の心忘れまじ

我ひとつ君ひとつ今日寒卵

若夫婦ピアノの上の鏡餅

寒晴や回転木馬動きだす

絵双六ばさばさ広げ始めけり

節子

焦らずとも願ひ叶ふと初みくじ

由紀子

餅花の赤白に赤飾り窓

寒の水足し鍛錬の墨を磨る

平成二十七年二月投句

【櫛田神社

（節分祭）

雉の眼の閉じし窪みや猟名残

四つ目垣に頭を預け水仙花

笹鳴の声高々と春立ちぬ

フードにも飛び込む一つ年の豆

ほうほうと声かけあひて猟名残

山容を浮かびあがらせ山火かな

園児らは前に集めて豆を撒く

豆撒の鬼に抱かれて泣く子供

同じ豆拾はんとして笑ひあひ

勝利

鬼やらふ声に小走り境内へ

撒かれたる豆の踏まれて追儼かな

一日に一つ事して寒明くる

福の門低くくぐりて節分会

大通り隔てし寺も豆を撒く

豆撒の都度に素通りできぬ友

佳与子さん来て恒例の鬼やらひ

大泣きに鬼も戸惑ふ鬼やらひ

木の芽吹く杞陽師系にゐる誇り

光子

真理子

由紀子

平成二十七年三月投句

【芦屋海岸 芦屋釜】

梅香る枝に浮き球ぶら下がり

春うらら関守石の丸き影

春うらら冬の制服重たげな

さ緑に染まる播りこぎ木の芽和え

海原へ流れし時報鳥渡る

春昼や居間に厨に電子音

玄海の波にまぎれて帰る鴨

春潮の波防波堤とくに越え

どこからも白き辛夷の見ゆる庭

勝利

待合の屋根にももの芽立ちにけり

漁小屋に鍵かけてあり鳥曇

落日に雲の湧き出で島おぼろ

木五倍子穂を垂れ初めてをり利休の忌

浜深く寄せゐる波や涅槃西風

外露地へ百年を経し山桜

三代経し白無垢飾る雛の間

誕生を祝ふ餅踏み山笑ふ

強東風や漁師たむろの船溜り

光子

佳与子

真理子

節子

由紀子

平成二十七年四月投句

【門司 下関(唐戸市場 三宜楼など)】

いつの間に鯨が亀に春の雲

フリージアその名を知りし初恋や

三宜楼出れば現の春の宵

勝利

水音の庭に聞こえて日永かな

光子

芳一の微かに仰ぐ春の闇

早世の彼に手向けしフリージア

夕風の岸边水母の浮いてきし

褪せてゆく日を海峡に春惜む

屈みみる七盛塚や春深し

佳与子

春帆楼コーヒー談議して日永

真理子

身をポンとはじきて女烏賊を売る

ベランダを飛び出す風の鯉のぼり

花びらがかけ上りくる下り坂

烏賊の足動くトロ箱うち重ね

がらす戸にゆがむ陽炎門司の町

節子

潮流の向き変り街かげろへる

由紀子

山の墓踊子草に囲まれて

八重桜満ちて敗戦烈士の碑

平成二十七年五月投句

【大濠公園 鴻臚館など】

大胆に絵具はみ出し新樹の絵

小次郎の陣羽織舞ひ卯浪立つ

鶯のホケキヨに体くねらせて

腹這ふて池を描く子園薄暑

置物と見違う鴨や園薄暑

十本の杭に三羽や通し鴨

大濠の真ん中に島松落葉

絡みつゝく昼顔柵に鴻臚館

菖蒲湯の菖蒲六束銭湯に

勝利

セルを着て仕立物屋の店の番

新緑のにほひ目つむり手をひろげ

ハヤの子のついと流され谷若葉

巢籠りの妻を守りてをりし鴨

芍薬の盛りも過ぎし鷹屋敷

母と浴む仕舞風呂好き菖蒲の湯

一雨の後のさみどり楠若葉

ジェラードにフルーツをのせ街薄暑

仮面付け踊る広場や月涼し

佳与子

真理子

節子

由紀子

平成二十七年六月投句

【宮地獄神社(菖蒲まつり)】

梅雨晴や茅花の絮を弾きみて

南天の花の縁先お針箱

花菖蒲閉じて赤子の手のやうに

勝利

南天の花に看取りの日々を聞き

光子

南天の花実に寄る鳥の話も出

菖蒲田の横に露地もの野菜売り

緑蔭に佇てば句帳を取り出して

初島は近く雲仙夏がすみ

花菖蒲一鉢づつが出店にも

佳与子

図書館の在りし記憶の茂りかな

真理子

運転す夏手袋は右手のみ

戦災の乙女像より夏の蝶

親戻るまでの静けさ燕の巢

途切れなき人神苑の花菖蒲

親を待つだけの一日燕の子

節子

さざ波の行き渡りたる植田かな

由紀子

入口に燕の巢ある小児齒科

黒南風の東京駅に着きにけり

平成二十七年七月投句

紅塵に千木を隔して夏木立

滝音を頼りに標なき道を

釣灯籠灯りて二つ梅雨曇

勝利

かなかなや御神楽殿に灯のともり

光子

女一人鳥居くぐり来夏木立

夏草に豊前筑前分かつ石

新しき蟬の抜け殻透けてをり

竹枕竹夫人片寄せし部屋

葛餅のゆれつつ皿におさまりぬ

佳与子

百合花粉またつけて犬戻り来し

真理子

飴色は旅館の歴史竹夫人

郊外の高校へ混む梅雨のバス

雨の蟻いっせいに幹下りはじめ

夫のもとへ行けとささやく青田風

追山笠に見入る人にも勢い水

節子

地上にも地下にも迷ひ拭ふ汗

由紀子

浮人形忘れた人の浮いてくる

炎暑より逃れ都心の地下通路

平成二十七年八月投句

近況を語り掛けをり墓灯籠

電柱に小枝集めてかちがらす

特攻のなにかも知らずかちがらす

勝利

秋立つや昼にぬるめの風呂をたて

光子

群青に思ひは深く川施餓鬼

家族のやうに暮らせし社宅盆の月

忘れぬし梅焼酎とやお納戸に

生きざまをひしとこの木に法師蟬

一升瓶ラベルも古りて梅焼酎

佳与子

捕えられ夏の一夜を籠に猿

真理子

看板の一字字隠し凌霄花

梅花藻の水底のふと夜空めき

鵲とともに団地に住み馴れて

引越して来し新宿の大西日

故郷を吹き渡る風稻の花

節子

西日中人の流れに抗ひぬ

由紀子

競ひ合ふかに雨音の法師蟬

墓参して父の形見の碁盤拭く

平成二十七年九月投句

老ならん言ふてしまひて秋の風

倒木に咲く昼顔や野分後

スーパーを出て芋下げて夕茜

残り香の千人草や野路の秋

人寄れば秋の蚊少し増えてきし

飾り羽ゆらぎて風に池の秋

両の手にこぼれるほどの零余子かな

ぼろぼろと落とさぬように零余子摘み

芋虫に思いがけない力あり

勝利

山の湯の豊冷やか茶を淹れて

堰堤の塔に銘あり秋の風

みんなや新築なりし駐在所

土砂崩れありて迂回の葛の道

遅れ来る人やゝ不安野分あと

さり気なく見送りくれし草の花

大出家財投げ捨つ老の背ナ

奇遇とは真にこのこと涼新た

露けしや都心の地下の地下に人

光子

真理子

由紀子

平成二十七年十月投句

【宇佐神宮（勅使祭）】

秋あかねスクランブルの交差点

初秋の旅それぞれの駅を発ち

寺多き三田を経廻り秋一日

勝利

勅使待つ宇佐神宮や秋天下

光子

枝折りて柿ずっしりと竿の先

寿命てふこともよぎりつ冬支度

名月を隠しきれざる雲ひとつ

鎮もれる闇の深さや宇佐の秋

提灯の灯落とせば秋の風

佳与子

提灯の列がミラーに曲る秋

真理子

土くれに落ちしむかごを見失ひ

神域の畦の匂ふや稲の秋

勅使橋外も夜の闇秋の川

行列に我も一灯秋祭

奉納の感応樂や秋祭

節子

秋水に口を禊いで祭使者

由紀子

提灯の列秋風に進み出し

金風や勅使渡りし橋渡る

平成二十七年十一月投句

【武蔵寺 天拝山山麓】

天守閣小さく威を張りゐのこづち

切支丹墓地へと石露の花明り

城垣の勾配にあり秋の声

勝利

新蕎麦と貼紙をして立つ亭主

光子

帰り花久女多佳子の句碑に佇つ

菊活けて丸山花月灯のこぼれ

見送りて踵返せば時雨来し

山茶花の庭に稻荷社祀られて

風はらみきしむ幟や神の留守

佳与子

町名の残る古地図や石露の花

真理子

柴漬を等間隔に沈め置く

名島門抜けし城跡櫓の実

落葉踏む音と遊具のきしむ音

神渡し軍艦島に立つ祠

朴落葉小さな谷を埋めつくし

節子

潰えたる立坑口に秋の風

由紀子

いつからか石露の花咲く庭となり

高塀は花街の名残り実千両

平成二十七年十二月投句

【小倉の街 鷗外旧居など】

靴音に水銀灯の寒さかな

重ね著をしてあいづちを打つばかり

燠白く匂ひたちたる堀炬燵

勝利

古曆節くれ立ちし手もいとし

光子

茶をすすめ子供自慢や冬籠

小春日の銀座楽しみ時計買ふ

見下ろせる駅の灯や年忘

ベンガラの鷗外旧居冬ざれて

細る川今日は一羽の冬の鳥

佳与子

行きそびれをりしうどん屋年忘

真理子

お洒落など言ふておられず重ね着て

走り根に足をかけたる冬山路

鷗外の小倉の夜を着膨れて

聖書館訪ふも銀座の十二月

集会の始まる聖樹入口に

節子

ブッフエの絵の黒き描線枯木立

由紀子

鵜来て双眼鏡の間に合はず

最終はモネの「黄昏」古曆